

>> 某国民的歴史小説家風

時代が変われば、若者が変わる。

だが、老いた者が「最近の若者は」と語りだすのは、いつの世も同じことである。

先日、ある介護事業者の経営者と話していた折、その人物がこう言った。

「最近の職員は、レクリエーションを好まないのです。QOLの向上などと言っても、どこか実感を伴っていない。

むしろ、“自立支援”という語ばかりが一人歩きしているように思えるのです」

介護という制度が整えられてまだ三十年余。

その中で語られる“QOL”という言葉も、“自立支援”という理念も、真に根を下ろすには、いささか時間が足りていないのかもしれない。

私はふと、エジプトの石板の話を思い出した。

紀元前、ナイルのほとりに栄えた文明の中で、ある神官が石に刻んだとされる文言がある。

「近頃の若者はヒエログリフを学ぼうとしない。神の言葉も彼らには届かぬ」

これが三千年前の嘆きである。

人間の本質というものは、そう容易には変わらぬらしい。

たとえ時代がどれほど進み、文字が石板からスマートフォンに変わったとしても、世代の断絶というものは、やはりどこかに横たわっている。

だが、誤解してはならぬ。

若者が怠惰なのではない。

彼らが受け取っている“言葉”が、真の意味を孕んでいないだけなのだ。

「QOL」という言葉が、ただの横文字であるうちは、それは理念ではなく、記号である。

「自立支援」という標語が、現場の風景と結びつかない限り、それはただの紙に書かれた文字でしかない。

神官たちは、ヒエログリフに神の言葉を込めた。
我々もまた、職員たちに語りかけねばならぬ。

その事実を、歴史の文脈の中で語ってゆくこと。
それが、いまを生きる我々の“神官”としての役割である。

どうでしょう。やや俯瞰的で、歴史や人間の業（ごう）を見つめるような口調を意識しました。

より「司馬遼太郎らしさ」を強調したい場合は、実在の人物や逸話を織り交ぜて書くスタイルにもできますよ。ご希望があれば、いつでも！